

今年の夏は異常に暑き日続き、友人とどこぞ涼しき所へ短き旅行せむと話し合ひ、長野の戸隠神社へ行く事となりけり。金澤行きの新幹線に乗車し二時間かからず長野に到着す。長野驛は一九九八年の冬季オリンピック以来降り立ちぬ。驛中に五輪エンブレム燦然とあり懐かしき事としばし見とれる。當時は季節として寒き二月にひと月長野にて仕事せること思ひ出す。

タクシーにて戸隠神社の中社へ上がれば、まるで空調効いてるかの如く涼し。待合室の窓も全開なり。十時より祈禱願ひ申請してあり、本殿へ案内せらるる。神官大太鼓を叩き祝詞上げる。龍描きたる高い天井の本殿にて友人二人と椅子に座す。祝詞と大太鼓の「合唱」は心地よく、瞑想状態になりぬ。

祈禱終はると丁度晝時なり。三人は戸隠蕎麥を所望すれど、周に何軒も蕎麥屋あり、いづこを選べば良きか難儀す。観光案内所のスタッフ曰くいづこにても「旨い」と言ふ。しかば安心してある蕎麥屋ののれんくぐり、美味なる蕎麥食す。

その後バスにて奥社の入口まで上がる。樹齢四百年の大杉の大木連なる参道を歩み始むと、片道三キロと表示あり。ひたすら上り坂にて半分は階段。降りて来る参拜者にもうすぐかと問ふと半分も歩いていらざる事判明。氣落す。最後は三百段近き階段上り三人とも言葉を交わすことも能はざるほど呼吸困難になりき。奥社と九頭龍社頂上にあり、参拜後山を下りるは、上るより難儀す。出口まで到達せしときは腰痛になれり。もう歩めずとタクシーに乗車し、少し遠回りなどなるにも、鏡池を通りて長野驛へ降りる道程選ぶ。鏡池にて寫眞映すため、タクシー降車すと、稻妻走り、遠雷聞こえる。ただちにタクシー發進させ、曲がりくねる坂道降りぬ。驛に到着するやいなや戸隠近邊には落雷と大雨にて通行止めになりしこと知らず「災害」アナウンスのメール届く。少し遅れてあれば、長野市内に戻ること能わず。お祓いのご利益なりと三人安堵のため息つかむ。歸路は疲れ果て、グリーン車に乗車す。JR東海に比ぶれば、東日本の車兩新しく、乗り心地良しと覺ゆ。

(平成二十八年二月八日受附)